

コロナ禍におけるネパール農村女性らの生活課題 — 「災害」をめぐる予備的考察 —

Livelihood Issues of Rural Women in Nepal Under COVID-19
: A Preliminary Consideration on Their Struggle Against Disasters

ながおか ちずこ
長岡 智寿子

〈要旨〉

災害が発生した際、私たちはどのように対処することが望ましいのだろうか。最先端技術を駆使した科学的知見から学び、具体的な根拠が示される中で行動や生活様式を改めていくことが妥当であるとする考えがある一方、科学とはおよそ無縁の伝承や古くからの訓えを重視する人々も存在する。

本研究の調査地（Lalitpur 郡, Bungamati 村 Khoincha 地区）は、2015年4月25日に発生したゴルカ大地震（M7.9）により甚大な被害を受けた地域である。大地震から6年が経過したが、未だ復興の途上にある人々の生活に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）がさらなる課題となり人々の生活を困窮化させている。本稿では大地震のみならず、COVID-19の感染拡大も「災害」と位置づける。都市部とは異なる様相を呈している農村社会の人々の生活世界に視座を据え、現在、彼らがどのように生活課題と向き合っているのか、ベースライン調査により得られた結果を踏まえ、質的把握を試みる。

〈キーワード〉

災害, 復興支援, 成人期の学習, 生活課題, ジェンダー

I. はじめに

1. 大災害を経験した社会において

(1) 災害といかに向き合うか

災害が発生した際、私たちはどのように対処することが望ましいのだろうか。最先端技術を駆使した科学的知見から学び、具体的な根拠が示される中で行動や生活様式を改めていくことが

妥当であるとする考えがある一方、科学とはおよそ無縁の古くからの訓えや伝承を重視し、生活を営んでいる人々も存在する。

本研究における調査地（Lalitpur 郡, Bungamati 村 Khoincha 地区）は、カトマンズ盆地の先住民族であるネワールの集落であり、伝統的な造りの家屋が並ぶ Bungamati バザールから約 2.5km に位置する（図 1 参照）。2015 年 4 月 25 日に発生したゴルカ大地震（M7.9）により甚大な被害を受け、Lalitpur 郡において最も被害が大きかった地域でもある。この村の女性たちを対象に、筆者は震災後も継続して調査を重ねてきた。特に、今後も起こりうる災害（地震）をいかに防ぐことができるのか、折に触れて人々にたずねてきた。しかし、得られた回答は、「防災？ ということ？」、「（地震は）いつ起こるか分からないのに、どうやって準備することができるの？」と、実に素っ気無いものであった。さらには、「そんなこと（地震や災害がいつ発生するのかについて）知っているのであれば、教えてもらいたい」と、半ば失笑気味の返答も多かった。その他、「（ゴルカ大地震は）きっと、神の怒りではないだろうか」、「（我々の日頃の行いが悪かったから）罰が当たったのだろう」と、おとなが真剣な表情で語り合う姿を垣間見ることになり、災害に対する捉え方や受け止め方にも大きく差異があることを知るに至った。同時に、「防災」の概念について容易に理解を得られることはない、と強く認識するに至った。

誤解のないように述べておくが、決して、この村の人々の見解に近代的な価値観や科学的知見が欠落しているとし、軽視するものではないことを断っておきたい。この地では、むしろ、大地震の発生が「神様の怒りではないだろうか」と受け止めた人々の認識の方が、ある意味、自然であり、妥当であるといえる。村落社会に暮らす人々の生活世界には「神への崇拜」が深く根差している。大地震により家屋が倒壊し、厳しく劣悪な生活環境になろうとも、信仰心により支えられている「日常」であることを理解することができるからである。朝晩の祈り、そして、自然への畏怖や祭事を決して忘れることのない人々の生活においては、地震発生のメカニズムへの科学的知見やその理解を求めることはむしろ、異なる次元で営まれている世界へいざなうようなものであるといえる。

(2) 問われる三つの視点：災害対策として

ところで、近年の国際社会における災害対策の在り方として問われていることに、次の三つの視点があげられる。一つは、災害リスクの削減（DRR: Disaster Risk Reduction）である。災害の直接的影響を科学的に防ぐのではなく、持続可能な開発という観点から、つまり、平時から社会の中に存在する災害脆弱性を最小限にし、対応力や回復力を高めようとする考え方である。二つには、脆弱性（Vulnerability）である。社会の中で、どのようなことが災害からの影響を受けやすいのかを把握することにより、被害の影響度合いを削減することができるというものである。三つには、復元・回復力（Resilience）である。災害による被害の拡大を防ぎ、いかに回復できる力を見出していくのが鍵となる。これらの概念について、「災害の原因である地震や豪雨などの現

象 (Hazard) と、社会の「脆弱性」「復元・回復力」が出会ったときに、災害の被害の大きさと復興の速度は決まってくる」(浅野,2016,p16) ことが指摘されている。さらには、災害リスクの削減に向けて、「ジェンダーの主流化 (gender mainstreaming)」が欠かせない。ヒンドゥー文化圏のネパールでは、社会生活の中で男女間における様々な不平等が存在している。ジェンダーの主流化に向けた実践は、今日では南アジア地域の開発政策の主要課題でもある。とりわけ、大地震以降の調査では、被災地での暮らしにおいて、女性たちの家事労働の負担が増し、心身にも支障をきたしていることが明らかになった。さらには、男性に比べ、女性たちは情報にアクセスすることができず、安全性が確保されてはいない深刻な状況に置かれていることも確認するに至った(長岡,2016,2020, Maharjhan,Shakya,Nagaoka,2021) ¹⁾。

(3) もうひとつの「災害」

ゴルカ大地震以降、被災地としてのカトマンズ盆地をめぐる情勢は国際的にも広く報道されてきたが、Khoicha 地区の人々の置かれた状況については明らかにされてはこなかった。地区の住民はボシ(Boshi)と呼ばれ、先祖代々、ラト・マツェンドラナート祭(カトマンズ盆地の雨乞いの祭) ²⁾ の山車を運営する大役を任されている。いわば、彼らはカトマンズ盆地の文化の担い手でもある。しかし、彼らは先祖代々、グティ ³⁾ が所有する土地に暮らしており土地所有の権利が付与されていないことから、大地震の罹災証明も発行されてこなかった。事実上、復興支援の対象とはみなされてはいなかったのである。

継続調査により明らかになったこととして、大地震による直接的な被害のみならず、地区の人々が不利益を被る事態がより顕著となってきた。一つには、カトマンズ盆地の復興に必要なレンガの生産のため、地区周辺を覆うかのごとく複数のレンガ窯が設置されたことから黒煙による大気汚染が深刻化していること。二つには、国の開発政策としてタライ地方(インドとの国境地域)へ続く幹線道路建設事業のために、農地が没収されてしまったことである。土地を所有していないことを理由に、政府からの補償は一切なく、生活の糧が奪われる事態になっている。さらに、2020年3月中旬以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大により、ネパール政府はカトマンズ盆地を中心に経済封鎖を実施した。人々の経済活動は一時停止を余儀なくされ、現金収入を求めて街に働きに出ていた Bungamati 村の人々の多くは失業し、生活はさらに困窮化することになっている。

ネパール国内における COVID-19 の感染拡大の状況について、WHO は医療崩壊、設備、リソースの不足等について”Public Health Disaster”と指摘し、早急に医療体制の構築、COVID-19 の感染拡大を防ぐための施策を働きかけてきた(WHO Nepal,2021)。しかし、2021年9月1日の時点でワクチン接種率は、国民(約2,970万人)の1.27%にとどまっており、公表されているデータも都市部を中心とするものでしかない ⁴⁾。その最も大きな原因は、本来、届けられるべきはずの情報が広く国民に届いていないことが挙げられる。

本研究では大地震のみならず、猛威を振るう COVID-19 も「災害」と位置づける。COVID-19 の感染拡大により経済封鎖が繰り返され、人々の経済活動が停止されていた最中、都市部とは異なる様相を呈している農村社会の人々の生活世界に着目する。大規模調査では確認できない周辺化された人々に焦点を据え、彼らが現在、どのような生活課題を抱えているのかについて質的な把握を試みる。本稿は限られた範囲で実施した調査結果を踏まえた予備的考察にすぎないが、今後の復興支援に向けた有効な視点を模索するとともに、成人期の学習課題を捉え直すことを目的とするものである。

Ⅱ. ベースライン調査の概要

1. ベースライン調査の概要

対象地：Lalitpur 郡 Bungamati 村 Khoincha 地区(55 世帯,約 300 名,2021 年 5 月現在)

調査協力者：地区内の 30 名 (男 18 名,女 12 名)

研究協力：Nepal Foster Mate, Radio Sagarmatha

目的：COVID-19 感染拡大下における農村女性らを中心とする生活課題を把握すること

調査方法：質問票の回答内容を踏まえ、半構造化インタビューを実施した。読み書きができない人には調査協力者のサポートにより記録した⁵⁾。

調査期間：2021 年 6 月下旬～8 月末まで。

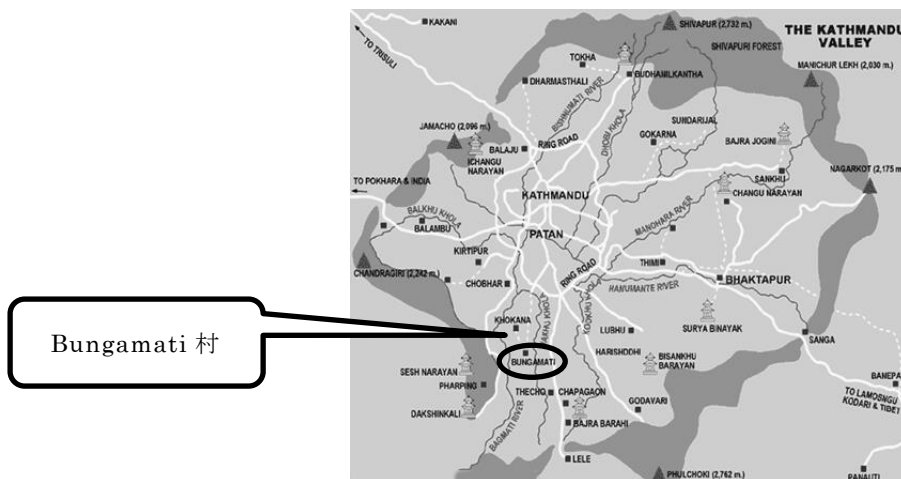


図 1

2021 年 4 月以降、カトマンズ盆地を中心に経済封鎖が実施されたため、Lalitpur 市内から Bungamati 村を自由に訪問することは不可能な状況にあった。バスや自動車、バイクによる移動も制限されていたからである。Bungamati 村の小学校 (Shree Mahankar primary school) の校長からは、かねてから、電話にて村落の現状が伝えられていた。その主な内容は、経済封鎖により物資の流れが停止し、自給自足を強いられる生活となってしまうこと、経済封鎖が長期化すればさらに深刻な状況になること、地区内の人々への医療情報、支援が決定的に不足しているこ

と等であった。このような状況下で、調査を実施することは Bungamati 村の人々のみならず、現地の研究協力者にとっても感染のリスクを伴うものであり、非常に困難な状況であった。時期を見合わせることも検討したが、校長から「村落外の人たちに生活困窮の現状について知ってもらいたい、伝えてもらいたい」と依頼があったため、検討を重ね、状況を確認しながらベースライン調査を実施することとした。

2. 調査対象者の属性、及び、回答内容について

(1) 年齢構成など調査への協力について

調査協力者は実施に際して趣旨説明を行った際、賛同を得られた人たち(30名)である。当初、女性を中心に協力を求める予定であったが、ヒンドゥー文化の特徴として、特に、村落社会では女性が自由に発言する機会に参加することを好まない慣習がなおも根強い。そのようなことから、協力を得られたのは、男性 18 名、女性 12 名という構成であった。また、年齢層においては 30 代から 50 代以上まで幅広く協力してもらった (図 2 参照)。しかし、自身の年齢を把握していない人も数名いたため、家族に確認することもあった。カースト構成については、マハラジャン (Maharjan)、プトゥワル (Putuwar) を中心とするものであった (図 3 参照)。ネワールのカーストは非常に細分化されている。Bungamati 村 Khoincha 地区はマハラジャンの少数派カーストの 1 つであるプトゥワルが居住している集落である⁶⁾。

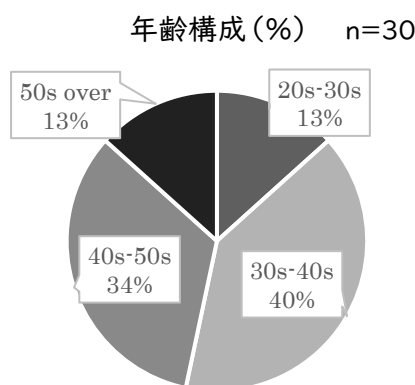


図 2

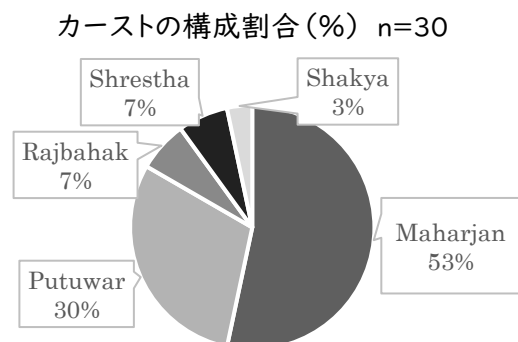


図 3

(2) 就労状況について

地区内の大半の世帯は農業で生計を立てている。現在、「就労している」と回答した人は 12 名 (40%) であった (図 4 参照)。いずれも男性であったが、就労しているとはいえ、自宅待機の状態であった。女性は小学校の教員 2 名以外は全員、未就労であり、家事労働の他、農作業に従事していた。建設現場にて日雇い労働に従事しているという人もいたが、建設業も経済封鎖期間は稼働していないため、給与が半額となることに不満を漏らしていた。

(3)教育環境について

Khoicha 地区に暮らす成人の多くは学校教育を受けていない（図 5 参照）。首都カトマンズからわずか 10km 離れた地理的環境にも関わらず、学校がなかったためである。調査協力者の内、36%は非識字状態（Illiterate）であり、1名以外は全員女性であった。ネパール語の読み書きが可能な人（Literate）は 27%、SLC（School Leaving Certificate：中等教育修了資格試験）⁷⁾受験資格が可能な 10 年生修了者（Under SLC）は 20%であった。新制度の 12 年間の教育（10+2）を受けているひとは 3 名であった。学士レベル（Bachelor）が 2 名いるが、これは地区内唯一の小学校、Shree Mahankal Primary School というコミュニティスクールの校長夫妻である。地元の NGO、Nepal Foster Mate の支援により 1993 年に設立したことから、村落に暮らす学齢期の子どもたちが学校教育を受けることが可能となった。初等教育 5 年、前期中等教育 3 年が無償の義務教育期間であるため、Koincha 地区の子どもたちが 5 年生以降の中等教育に進級するには、バザール近くにある中学校に通うことになる。このような教育環境ではあるが、地区内で基礎教育の機会が保障されたことにより、これまでに Koincha 地区から 20 名が 10 年生を修了するまでになったことは朗報であった。

就労状況 (%) n=30

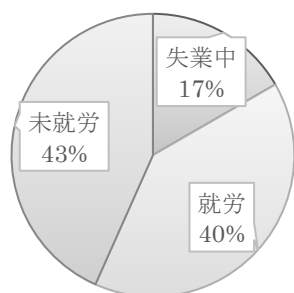


図 4

教育歴の状況 (%) n=30

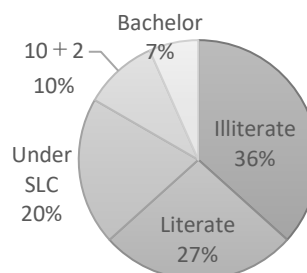


図 5

(4)メディアの使用状況

情報ツールとしてテレビ、モバイル、ラジオ[モバイル経由]が使用されていた（図 6 参照）。テレビの利用が 29%、ラジオ（27%）、モバイル（28%）という使用状況であった。インターネットを利用している人は 12%だが、常時、アクセス可能という状況ではないという。ソーシャルメディアは若者の間では人気がある。新聞を読む人は 4%であった。ラジオはモバイル経由である。「聴いている」と回答した人の中には、「（モバイルやラジオを）持っていないが、茶店に行けば誰かがラジオを聴いているから」と、流れてくるラジオ放送を確認することで情報収集しているということであった。

Media の使用状況 (%) (複数回答)

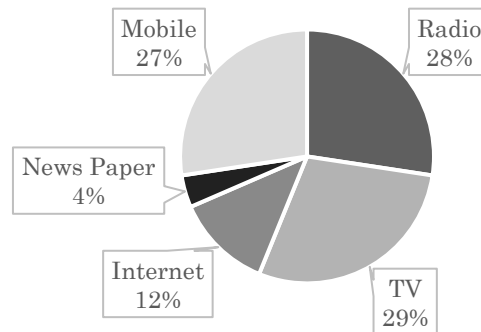


図 6

(5)必要な情報,及び生活課題について

経済活動が停止している状態では現金収入がなく,畑で収穫した野菜類を市場にて販売することも不可能である。生活がかなり困窮化していることを訴える人が多かった。大地震により倒壊した家屋の再建が不可能であることやローンを組んでいるが返済できないと嘆く人も多かった (図 7 参照)。

現在の生活課題について (複数回答)

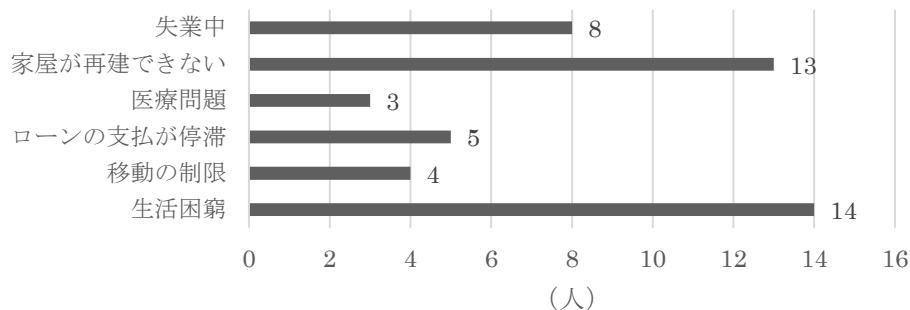


図 7

現在,必要としている情報については,COVID-19 に関する情報や医療関係の情報を求めている人の他, 女性たちからは手工芸品を制作するスキルや農作業の新しい方法を学ぶトレーニングプログラムの情報を求める声が多かった。厳しい状況を乗り越えていこうとするエネルギーが感じられた。(図 8 参照)

必要な情報について(複数回答)

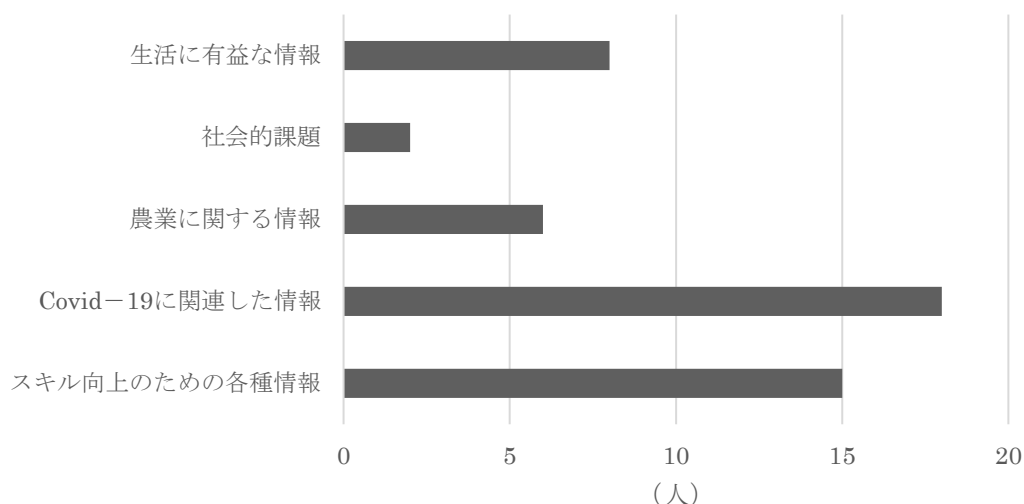


図 8

(6)感染症をめぐる

COVID-19 のパンデミックは、ネパールの人々の生活に悪影響を及ぼしている。ネパール国家計画委員会の調査によると、約 16 万人が職を失ったという⁸⁾。人々の経済活動に直接的に不利益を及ぼしてきた。移動の制限もあり、特に、医療機関へのアクセスは深刻化してきている。血圧、検温、尿検査、血液検査などの基本的な健康診断を受診することさえ非常に困難な状況である。慢性的に疾患を抱えている人でさえ定期的な検査のために病院を訪れることができず、不安を表していた。調査では、40 歳代後半の女性の大半が呼吸器系の問題があることが確認された。心臓病を患っている人もいた。慢性疾患に苦しんでいる人々においても、経済封鎖のために必要な薬さえも入手することができなくなっていた。

Khoicha 地区における感染状況については、経済封鎖期間であることから外部から訪ねてくる人が限られていることもあり、調査時においては人口約 300 人の地区内で感染が確認されたのは 2 名だけであった。その内、1 名は死亡、もう 1 名は回復の途上（入院中）にあるということであった。感染対策として、人々は政府が設定したコロナ対策に従っているということであった。しかし、政府が国民に呼びかけているソーシャルディスタンスやマスクキャンペーンについて、把握している人は少なかった（図 9 参照）。経済的に消毒剤を購入することも厳しく、街に出かける時にはマスクを使用しているということであったが、特に、女性は外出する機会もなくなっているため、マスクを持っていないという人が多かった。そのため、Lalitpur 市内で消毒剤とマスクを購入し、地区長と校長から配布してもらうことにした（図 10、図 11）⁹⁾。

Nepal Mask Campaign will start from 7-13, August, 2021.
This public health campaign will raise awareness around the importance of wearing a mask.



出典 : <https://nheicc.gov.np/2021/08/nepal-mask-campaign/> 2021,8,7

図 9



図 10



図 11

(7)地区の医療体制,及び,家庭療法について

ゴルカ大地震以降,地区周辺がレンガ工場の窯に囲まれることになり,工場の稼働時は窯から出る煙により大気が汚染され,肺を患う人が増えているという。地区内には医療機関がないため,体調不良の際は,村落から 2.5 キロ離れたバザールの保健所にて診療を受けることになる。しかし,簡易的な診療のため,症状によっては Lalitpur 市内の病院を受診することになる。受診するには経済的負担が増すため,人々は家庭療法や伝統的療法を好んでいる。アーユル・ヴェーダ(インドの伝統的医学)やダミジャンクリ(祈祷)¹⁰⁾による療法の他,ターメリックやショウガをすり,お湯に混ぜて飲むという世帯が多かった。風邪や発熱の症状の際は,このような伝統的治療法と家庭療法により対処している。しかし,婦人科系の病などの治療は困難であり,女性たちの

間でも関心事の一つであった。

(8)女性たちの生活

地区内の女性の大半は一日中、家、または、畑で過ごしている。高齢者が孫の世話をし、日々、家事を担っている。現在、農業以外に仕事ができず、職には就いていない。グティが提供する土地で農作物を栽培し、自給自足の生活を送ってきたが、今日では幹線道路の建設により、農地が没収されてしまった。さらに、経済封鎖により日雇いや市場での仕事がない日々において、息子たちからの現金収入も滞り、生活は困窮していると訴える人が多かった。しかし、COVID-19について、また、感染症が日常生活にどのような影響を与えているのか全体像を把握している人は少なかった。

3. インタビュー調査について

インタビュー調査の主な内容は、コロナ禍の生活や仕事を失ったことへの不満、今後の不透明な生活状態について不安な気持ちを吐露される内容が中心であった。心理的不安が募っていることが確認され、中には涙ながら話す女性もいた。主な内容は次のとおりである。

- ・ゴルカ大地震以降、劣悪な環境下での生活が長期化していること。
- ・家事労働の他、体調を崩した家族も多く、全面的にサポートしなければならないこと。
- ・喘息、心臓病、高血圧や関節炎等の慢性患者の多くは、経済封鎖の間、病院や保健所を訪問できないこと。
- ・生活困窮のため、医療費が払えない人が圧倒的に多い。地区内の 55 世帯の内、13 世帯は毎日、食事をとることも困難な状況にあること。

ここでは、インタビュー調査の事例として、次の①～③の女性のインタビュー記録を紹介する。¹¹⁾

事例①

調査協力者の中で唯一、ワクチン接種を済ませていた女性（40代後半）

- Q: COVID-19について知っていますか？
 A: いいえ、知りません。
 Q: マスクはつけますか？ 今日からマスクキャンペーンですね。
 A: マスクは呼吸が苦しくなるのでしません。必要な時は、こうしますから。（ショールで口を覆う）
 Q: ワクチン接種は済みましたか？
 A: ええ……接種しました。先週に。
 Q: あなたは、COVID-19についてご存じなのですか？
 A: 病気のことには知りません。でも、畑にいたら、男性がやって来て、「薬の注射をするから来てください」と呼ばれたから行きました。
 Q: その注射はCOVID-19のワクチンなのですが、ご存じでしたか？
 A: ええ！（驚く）そんなこと知りませんよ!!（笑）
 薬なんてありませんから……。先日、家族が発熱した際、しょうが湯やターメリック水を作り、飲ませました。私の薬（しょうが湯、ターメリック水）でよくなりましたから。

この女性とインタビューした際、政府が「Mask Campaine」を公表していた（図9参照）。しかし、キャンペーンの情報などは入手されておらず、そもそも、COVID-19について把握されてはいなかった。そのため、ワクチンについても理解せずに接種していたことを、インタビューの際に初めて把握されたという事実が明らかになった。

事例②

大地震以降、仮設住居で生活している女性（50代）

- Q: ニュースや政府からの情報はどのように確認しますか？
 A: ラジオです。息子が教えてくれたり、近くにいる人から聞くこともあります。
 Q: 身体の具合は大丈夫ですか？（以前、家族が喘息であったことを踏まえて）
 A: 今は空気がきれいでしょう？（雨季でレンガ工場も稼働停止中）
 息子たちも仕事がないから、食事の方が困っています。
 （しばらく沈黙の後、涙）
 私たちは何も悪いことはしていません。我が家は（住居を再建すること）いつまでもこのままだから、不安で何もできない。
 もう（家を建て直して）住んでいる人もいるのに……。
 Q: COVID-19についてはご存じですか？
 A: いいえ。さっき、「咳をしている人はテストして下さい」と先生が言ってましたが、何ですか？ 病院に行かなくても、風邪の治し方は知っていますよ。

経済封鎖により街での仕事もないため、仕方なく、家族全員が村で生活しているということであった。現金収入が途絶えてしまっているため、生活はかなり困窮している状況であった。そして、この女性も感染症については「知らない」ということであり、現在、生じている出来事について理解はされていなかった。息子たちも特に説明はしていないと話しており、失業し、何もでき

ないでいる状態を憂いていた。

事例③

母親を COVID-19 により亡くした女性（50 歳,夫,息子と生活）のインタビュー記録の一部を紹介する。地区で COVID-19 に罹患し,死亡が確認されたのは調査時において 1 名のみであった。

Q.: 現在はどのような生活ですか？

A.: 特別なことは何もありません。足に激しい痛みがありますので家にいます。手術をするように言われています。血圧が高いと言われていています。どれほど高いかはわかりません。おそらく,150 を超えていると聞きました。

Q.薬は定期的に飲んでいますか？

A.:はい。私の息子が持ってきてくれます。1日1回,健康診断なしで薬を飲んでいます。息子は私が何度も診断に行くことを提案しますが,それは難しいです。ブンガマティのバザールか病院に行かなければなりません。息子は私を街に連れ出すのを恐れていますし,車もありませんから。もう,1年半が経ちました。

Q.コロナについてご存じですが？

A.:皆,それについて話しますが,私にはよくわかりません。最近どこにも行っていないので。どれだけ辛いことか説明できませんが,その病気（COVID-19）のせいで母を亡くしました。病院に運ばれましたが,亡くなりました。（溜息）

Q.お母さんに会う機会がありましたか？

A.:彼女に会った際,ひどい風邪をひいていると言っていました。高熱でした。母は病院で検査（PCR）を受け,陽性となったわずか1週間後に亡くなりました。最後に,もう一度,彼女に会うことはできませんでした。（溜息）

彼女は私よりも働き者で,元気でしたよ。だから,突然,亡くなったんです。死のわずか1日前に衰弱の兆候はありませんでしたから。まったく信じられません。

Q.お母さんは,何か他の病気を患ってはいませんでしたか？

A.:彼女は肺炎を治療するために入院したことがあります。おそらく,2015年の地震から1年後のことでした。その後の健康上の問題はありませんでした。

Q.今,家庭内でどのような問題がありますか(食べ物や仕事)?

A:食糧の不足が大きな問題です。夫と息子は仕事を失いました。ロックダウンが2回延長されました。皆がいつも家にいるというのに,一体,何ができますか?地震で壊れた家のローンは返済できませんよ。息子の大きな問題は,家にいるか,ローンを返済するかです。貧しい人々には命なんてなく,餓死するんじゃないですか?ファーストトラック(幹線道路の建設事業)は私たちの限られた農地まで奪いました。農業ができれば,過ぎしやすかったでしょう。

Q.家はまだ完成していませんよね?

A:ドアや窓を修理するお金がありません。私たちは3万ルピーの援助を受けましたが,それだけでは十分ではありません。ですから,未だ仮設に住んでいます。時々,私は一生をこの小屋で過ごす必要があるかどうかを考えてしまいます。私たちには良い収入源がありません。

Q.あなた方は補償のためにロビー活動をしませんでしたか?

A この村の人々は読み書きができません。もちろん,意見は言いましたよ。でも,地元の指導者/活動家は,政府に話をする事ができなかつたと言っていました。他に誰が私たちをサポートしてくれますか?新しい家を完成させるには,あと,3ラーク(約30万円)が不足しています。ドアと窓はまだありません。夫は石工職人ですが,今は失業しています。土地があれば売ることができますが,一体,どうすればよいのか……。私たちには何もありません!

大地震の後,住居や村落周辺の環境が大きく変わっただけでなく,これまで生活の糧を得ていた農地も幹線道路建設のために没収されてしまった。地区長の話では,政府は農地についてはグティのものであり,個人名義ではないことから,地区の人々とは交渉しないということであった。人々に理解を得られるような丁寧な説明があればと思うが,そのような状況ではなかったことが伝わってきた。

事例①～③の他にも,仮設小屋での生活により,夫を亡くした女性や,レンガ工場による大気汚染により喘息を患ってしまった高齢の人たちとのインタビューは厳しいものであった。経済的な問題から薬を購入することもできないでいる。心臓病,高血圧の問題を抱えている人,変形性関節症の患者など,慢性的疾患を抱えている人の多くは,このパンデミック期間中に病院や保健所を訪れることも不可能な状態にあった。しかし,「よく分からない病気(=COVID-19)」に恐れ,不安を抱きながらも生活維持のために何とか新しいスキルを獲得し,乗り越えていこうとポジティブな想いを聞くことができたことは,逆に勇気づけられた次第である。

Ⅲ. 考察

1. Khoincha 地区の歴史的背景：「ランプの下の暗闇」として

本稿は、ゴルカ大地震により甚大な被害を受けた Bungamati 村 Khoincha 地区の人々が、未だ復興の途上にある中、COVID-19 の感染拡大によりさらに深刻化する様相をもうひとつの「災害」と位置づけ、農村社会におけるコロナ禍の生活課題について質的把握を試みたものである。

これまでに何度も訪問を重ねてきた場所であっても、コロナ禍で、調査を実施することは実に難しく、また、緊張を強いるものであった。しかし、厳しい状況下で取り組んだことから、Khoincha 地区に暮らす人々が、幾重にも社会から周辺化されてきた歴史的背景が浮き彫りになってきた。

住民の L.Putuwar 氏（75 歳）によると、「Putuwar のコミュニティは Bungamati 村全体からは影に隠れたような存在であるが、ネワール文化の保護に重要な役割を果たしてきている」という。¹²⁾ Putuwar の人々は古くからカトマンズ盆地の先住民であり、明確な証拠はないが、ある時期のラト・マツェンドラナート祭から、祭りの山車を作るために森に入り、木材を集める役割が与えられたと伝えられているという。この他、地区の名である「Khoincha」という語は、泣く（Cry）を意味するネワール語の「Kho」に由来する。地区の名称が「Khoincha」（泣いている人たちの場所）と名付けられた背景には、かつて、天然痘を患った人々が集められた集落であったことによる。ボシ（Boshi）として、ラト・マツェンドラナート祭の山車の運営に関わる以前のことであるという。

調査の過程で、「ランプの下の暗闇（बत्ती मुनि अन्धारो）」というネパールの諺を用いて現状説明を受けた。その言葉が意味するように、Khoincha 地区は賑やかな都市部からそれほど遠くはない地理的距離にあるにもかかわらず、人が安全に暮らすために必要な基本的ニーズを享受するには困難な状況にあり、また、先祖代々に渡り周辺化され続けているといえよう。

2. 女性の日常的実践への着目することの意義

地区に暮らす男性は村落外に働きに出かける機会も多いため、村落の「外」の情報を見聞きすることが可能である。しかし、女性の多くは村落「内」で過ごす生活が日常であり、「外」でどのような事が生じているのか把握することができず、「外」から帰ってきた人から口頭で聞く情報に依拠してきた。経済封鎖により人の移動が制限されていることから、女性たちはさらに「情報弱者」という状態に陥っているといえる。口承中心の日常生活において、アクセス可能な情報ツールはテレビ、ラジオとなるが、毎日、確認できるわけではなく、コロナ禍においては正確な医療情報も届いてはいないとなると、感染症の感染拡大を防ぐことのみならず、安全保障の観点においても深刻な問題であるといえる。

また、体調を崩した際、余程、深刻な状況でない限り、医療機関を訪問する人はいなかった。アーユル・ヴェーダ（インドの伝統的医学）を好む人やダミジャクリ（祈祷）による治療の他、ターメリック水や生姜湯により身体を温める療法が主流であった。家庭内で女性が家族のケアを

行うことにより継承され、世代を超えて受け継がれていく知見は、彼らが生きていく術と考えられる一方、「無形の文化遺産」としての価値を帯びているとも捉えられる。経済的理由に基づくともいえるが、家庭内における女性の役割は災害時においてはどのように展開されていくのか、継続して女性たちの日常的実践に着目し、質的な検討を重ねたい。

3. 「災害」を乗り越えていくために：封鎖から学び合いへ

災害を経験した社会においては、不均衡な関係性に基づく不利益を生じさせる構造が明らかになるというが、本研究においてはまさに社会的な弱者に重く負担がのしかかる様相が把握された。災害の直接的影響を科学的知識により防ぐことのみならず、その後の社会の復興という観点からも、「平時からその社会の中に存在する脆弱性を最小限にし、回復力を高めようとする実践」（浅野,2016,p.16）が必要であることに強く気づかされた。では、地域社会における復元・回復力を育むために、次のような課題が求められるのではないか。

第一に、被災地に暮らす人々の「記憶」を記録することである。文字の読み書き能力を持ち合わせていない人たちが、自らの言葉で想いを語ることは重要である。災害を経験した者としての集合的記憶、かつ、個人的記憶として扱われるものであると考える。口承を中心とする社会、集団においては、「文字文化」よりも「声の文化」が支持される傾向がある。このことは、地区の人々の情報収集にまつわる行動様式においても顕著であった。Khoichaの人々の経験をどのように記録していくことができるのか、検討することは意味がある。

第二に、生活課題の共有化を図ることである。農村女性らの生活課題の一つに「情報へのアクセス」を促進することがあげられる。安全な暮らしを確保する上でも重要であり、また、女性の社会参加に向けての第一歩になる。感染拡大を抑制するために地域間を封鎖する措置がとられてきた。しかし、封鎖することだけでは問題は解決しないであろう。適切な情報を届け、現状について互いに「知ること」が安全な生活を確保することにつながっていくものとする。

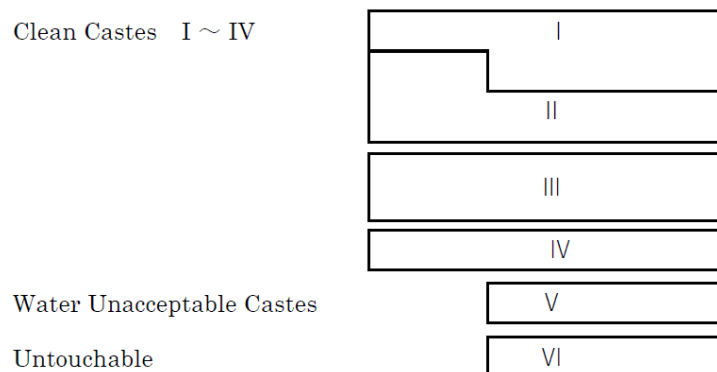
最後に、厳しい状況を承知でベースライン調査を試みた結果、現地の研究協力者においてもKhoicha地区の人々との「つながり」を大切にすることに気づかされたという。ロックダウンは感染症の感染拡大を阻止するための緊急策であったことは誰もが承知している。しかし、このコロナ禍を乗り越えていくために、遠隔における情報提供の必要性は不可欠である。そのため、「災害」と向き合いながら厳しい生活環境と闘っている人々の生活課題から学び合うことも支援のひとつに資する。封鎖から学び合いへと視点を広げていくことが、災害を経験した社会における復元・回復力を育むプロセスになるのではないかと考える。とりわけ、地域社会の現状について取材を重ね、辺境に暮らす人々の肉声を拾い、音声により伝えるコミュニティラジオ放送局の活動は、コロナ禍においてより重視されている。広く地域社会の人々に情報へのアクセスを促進させることに繋がる上でも意義深い。今後は、例えば、農村女性らが問題視している健康の維持、家庭における健康学習などをテーマにした遠隔プログラムを制作し、放送実施する

など、成人期の人々が広く学び合える環境を考案し、育んでいくことが社会的にも突き付けられた課題となろう。ノンフォーマルな学びのあり方は実に多様であり、多くの可能性を秘めている。

*本研究は、JSPS 科研費 18K11790 の助成を受けて取り組んだものである。

＜注＞

- 1)筆者らは大災害からの復興支援を念頭にラジオ放送番組（Bungamati Aawaji:ブンガマティ村の人々の声）を企画し、放送実施（2020年10月～2021年3月末）を行った（長岡,2020,Maharjhan,Shakya,Nagaoka,2021）。Khoincha地区の住民たちが声を上げるためのプラットフォームとして制作したものである。地区の現状をラジオ放送により周辺地域に伝えたことが契機となり、放送終了後、地域行政局は倒壊した家屋の再建を許可するに至った。
- 2)カトマンズ盆地の代表的な4つの観音（マツチェンドラ）の一つである。ラト・マツチェンドラナートはブンガ・デョーとも呼ばれ、雨を降らせる神として仏教徒やヒンドゥー教徒から絶大な信仰を集めている。5月下旬頃、赤く塗られた観音が山車に載せられて Lalitpur 市内を巡行する。日本ネパール協会編『現代ネパールを知るための60章』,明石書店, p.374, 2020.
- 3)直接的には集会を意味するが、ネワールの宗教・文化活動、公益、慈善事業等を行う基礎的な社会単位である。組織によっては貯蓄、頼母子講的活動、金融・投資活動を行うものもある。日本ネパール協会編『現代ネパールを知るための60章』,明石書店, pp.306-310, 2020.
- 4)https://covid19.mohp.gov.np/covid/englishSituationReport/612f66c750fc6_SitRep570_COVID-19_01-09-2021_EN.pdf (2021年9月1日閲覧)
- 5)調査を実施するに際し、Bungamati村、Khoincha地区の地区長の許可を得て実施した。調査協力者の個人情報を把握するため、質問票（質問項目：氏名、年齢、使用言語、教育歴、カースト、現在の就労状況、日常的に使用する情報ツール、現在の生活課題、必要な情報）を用意し、記入していただいた。しかし、すべての項目について回答できない人も多く（年齢や教育歴など把握されていないため）、詳細なデータを得ることは困難であった。そのため、インタビューの際に得られた回答を踏まえて聞き取りを行うこととした。また、本稿で紹介する事例については事前に協力者、及び、家族の方にも承諾を得て紹介するものである。
インタビュー調査に際しては、Wifiにアクセスできる環境を整えてもらい、筆者もオンラインにて参加し、村落の状況を把握できるように進めてきた。ネットワーク不良により、上手くコミュニケーションが取れないこともあったが、現地研究協力者の尽力により、調査が可能となったことを感謝している。
- 6)ネワールの主要なカーストは、次の6つの区分に大別される。
I：バジュラチャリア（Vajracarya 僧侶、司祭）、サキヤ（Sakya 金細工）、II：シュレスタ（Shrestha、役人、事業家）、III：マハラジャン（Maharajan 農業、大工、銅細工）、IV：カダギ（Khadgi 農業、楽士、床屋）、V：カパリ、サヒ（Kapali, Sahi 肉屋、楽隊、仕立屋、皮革工）、VI：デウラ、ポデ（Dyahla, Pode 清掃業など）。I～IVは Clean Castes、V～VIは不可触カーストとされ、I～IVのカーストの人々に水を直接、手渡すことができないとされている（Geller, p.46, 1992）。Putuwar カーストは、IIIのマハラジャンカーストの下位層に位置する。



注) Geller,p46,1992 より,筆者作成。

- 7) SLC (School Leaving Certificate) とは、中等教育修了資格試験である。今日のネパールの教育状況では、3歳になると就学前教育（日本の幼稚園）、5歳から基礎教育機関に入学し、1年生～8年生（初等教育、前期中等教育）まで学ぶ。SLCに合格しなければ高校に入学することができない。また、このSLCのテスト結果はその後の経歴にも影響するため、新制度（10年生までの教育に2年就学期間を延長した12年間の教育）に改

訂されるに至った。

- 8) 612f66c750fc6_SitRep570_COVID-19_01-09-2021_EN.pdf.mohp.gov.np,2021年9月1日閲覧
- 9) Kaji Ratna Shakya 氏(Nepal Foster Mate)により撮影。
- 10) ダミジャクリ (DHAMI JHAKRI) は、霊媒師が太鼓を叩き踊りながら祈祷する習俗である。病気の治癒のために灰で絵を描きながら祈祷することもあり、伝統的な民間信仰として人々に支持されている。
- 11) 2021年8月8日、10日、Samjhana Maharjha 氏 (Radio Sagarmatha) と筆者によるインタビュー記録の一部。日本語訳は筆者。
- 12) 2021年8月8日、Samjhana Maharjha 氏 (Radio Sagarmatha) と筆者によるインタビュー記録の一部。

<引用・参考文献>

- 1) 浅野幸子, 女性やジェンダーの視点から考える災害・防災・復興, BIOCITY, No.67, pp12-21, 2016
- 2) 石井溥, 聖地カトマンドゥ：諸宗教・観念の複合と変化 (特集3：雲南懇話会からの寄稿), ヒマラヤ学誌, No.18, pp.147-157, 2017.
- 3) Dahal & Aram, Empowering Indigenous Community through Community Radio: A Case Study from Nepal, Qualitative Report 18(82): pp.1-26, 2013.
- 4) Dahal, S., Power, empowerment and community radio: Media by and for women in Nepal, Women's Studies International Forum Volume 40, pp44-55, September–October 2013.
- 5) Geller, D.N., Caste and religious affiliation, pp.41-72, Monk, Householder, and Tantric Priest, Cambridge University Press, 1992.
- 6) Government of Nepal National Planning Commission, 2015, Nepal Earthquake Post Needs Assessment
- 7) IFJ, Research Study Media and Gender in Asia – Pacific, Country Report, 2015.
- 8) 板谷(牛谷)・ジグヤス, 「カトマンズの歴史都市における文化遺産の災害脆弱性に関する事例的研究」, 立命館大学歴史都市防災研究所, 2010.
- 9) 国立教育政策研究所 社会教育実践センター, 『社会教育における防災教育・減災教育に関する調査研究報告書』, 2012.
- 10) Maharjan, Shakya, Nagaoka, Bungamati Aawaj, 2021
- 11) Nagaoka & Karki, Using Community Radio in a Rural Women's Post-literacy Programme in Nepal, Journal of Learning for Development- JL4D, Vol.1, No.2, 2014.
- 12) 長岡智寿子, 「共に学び合う「防災教育」の必要性: ネパール大地震からの復興に向けて」, 国立教育政策研究所紀要第145号, pp.155-167. 2016.
- 13) 長岡智寿子, 『ネパール女性の識字教育と社会参加: 生活世界における学びの実践』, 明石書店, 2018
- 14) 長岡智寿子, 「地域づくりとメディアの役割をめぐって-社会教育活動としてのラジオ放送番組「Bungamati Aawaj」の事例-」 田園調布学園大学紀要, 第15号, pp.59-71, 2020.
- 15) 長岡智寿子, 「災害」をめぐる闘い: ネパール女性の語りと社会参加の様相から, 第68回日本社会教育学会研究大会, 口頭発表資料, 2021年9月11日
- 16) 長崎・大窪・林・幸野・古川, 世界遺産カトマンズ・パタン地区における地区防災計画を実践するための活動指針の提案: 防災都市計画を実践するための住民評価を通して, 2013.
- 17) オング, W, J, 『声の文化と文字文化』, 林 正寛, 糟谷 啓介, 桜井 直文 (翻訳), 藤原書店, 1991, p.405.
- 18) 立命館大学歴史都市防災研究所, Disaster Risk Management for Historic City of Patan, Nepal, Final Report of the Kathmandu Research Project, 2012.
- 19) サキヤ・大窪, 歴史都市パタンにおける1934年大震災後の避難生活の実態, 歴史都市防災論文集 vol.8, 2014.
- 20) 脇村孝平, 独立後インドの健康と医療・公衆衛生, pp.187-202, 『現代南アジア④開発と教育』, 東京大学出版会, 2002.
- 21) WHO Nepal, Focused COVID-19 Media Monitoring, Nepal, 2021